

2012年2期

## 多文化コミュニケーション入門 II

牲川波都季

自分が作りたい社会=文化をめざして一何のためのコミュニケーションかー

このクラスの授業タイトルは「多文化コミュニケーション入門」です。コミュニケーション能力を身につけたほうがいとよく言われますが、どうしてなんのためにそんな能力が必要なのでしょう？

このクラスでは、受講生のみなさんに、自分にとって大切なコミュニティを選んでもらい、そこで生きている人へのインタビューやレポートの執筆を通して、そのコミュニティの意味と今後の目標を探してもらいました。コミュニティをこうしたいという思いがあって、そのためにコミュニケーションすると、私は考えるからです。

今学期、みなさんが選んだコミュニティです。

学校 (秋田大学)	高校の同級生	教会
学科 (OT)	農村体験	バイト (先輩)
クラス	学術祭の演劇	めっき工場
友だち (寮, 周り, 大学, 高校)	部活 (少林寺拳法部)	コンビニ
213号	サークル (TNP, BORDERLESS,	団体活動
仲間たち (味方)	アカペラサークル)	故郷
秋田のベトナム人留学生	多文化交流ラウンジ	家族 (兄妹)
中国人の集まり	図書館	ミズキ
学友会	日本語学校	本郷様

A2グループの5人は、全員がサークルをテーマに選びました(グループ名も「サークルと私の関係」)。しかし同じ「サークルと私」であっても、サークルというコミュニティの中身やそこでどうしていきたいかは、一人ひとりまったく違っています。ツェレンドルジさんは今秋田大学で合唱サークルにいますが、そこが大事なコミュニティなのは、歌や音楽というものに強い興味があり、それがないとやる気が出ないし、一つの興味を進化させることは人生の一つの幸せだと考えています。劉さんは秋田大学にある中国人学友会をテーマにしました。このコミュニティの意義を、劉さんは、生活の助けだけでなく孤独や頼りなさを解消する感情の助けをもらえる場だと書いています。村上さんは **BORDRLESS** という留学生との交流サークルを選びましたが、ほかの2人のメンバーにインタビューしてみて、その人たちと自分にとってのサークルの意味が違うこと、自分にとっては将来につながる場であることを再発見しました。シンさんは、学外でのアルバイトと同じくらい大切なコミュニティとして、**BORDRLESS** を選び、同じグループの村上さんにインタビューしました。さまざまな国出身の人たちと出会い、未来に影響力がある場だと考えるようになりました。ただシンさんはアルバイトのことも熱心に書いていて、その二つのコミュニティが同じくらいシンさんにとっては大切だと感じられているように思いました。柳谷さんはプログラミングサークルを選びましたが、このレポートを書いている間にそのコミュニティ

への関わり方が変わりました。今柳谷さんは、スキルの向上という自身の目標のために、コミュニティを再構築しようとしています。

同じサークルというコミュニティであっても、それぞれの具体的な中身も捉え方もまったく違います。BORDERLASS という同じサークルを選んだ、村上さんやシンさんのレポート、柳谷さんのインタビュー結果を読むと、一つのコミュニティに対して人がもっているイメージや意味付けの違いがよくわかります。

たとえば私は、秋田大学の国際交流センターという、一つのコミュニティで今働いているわけですが、私と別の同僚とでは、そのコミュニティの見え方はまるで違うのではないのでしょうか。同じセンターで働く教員であれば、仕事場所も仕事内容も基本的には同じはずですが。けれども、国際交流センターの中にいる人をどんなふうに見ているか、そこでの仕事をどんなものと捉え、そこにどんな意義や価値を見いだしているのか。国際交流センターのように、名前は同じ社会であっても、各自にとってそのコミュニティの見方は異なっています。何か確かな、真実のコミュニティの姿というものがあるのではなくて、一人ひとりが異なるコミュニティ像を持っているのです。

ほかの人もこのコミュニティをこう思っているはずだとする「常識」は、非常にあやふやなものではないかありません。隣の人は全然違うようにそのコミュニティを見ているのかもしれない。だから、そのコミュニティで自分のめざすことを達成したり、そのコミュニティを変えていきたいならば、自分が考えていることを声に出して伝えるしかありません。自分の考えていることと、ほかの人の考えていることには必ずずれがあります。ことばにして出したところで、そのことばについての理解も人それぞれ違うでしょう。だからこそなおさら、自分の考えを話し、相手からも話してもらってどれぐらいわかってもらえたかを確認し、そのうえでさらに伝え続けていく必要があります。そうすることではじめて、自分自身の考えをそのコミュニティで実現することができます。

この授業は、多文化コミュニケーション入門というタイトルです。文化との関連で言えば、私は、みんなが見つけたコミュニティそれぞれが文化を持っていると考えます。レポートを書くことで、このコミュニティは自分にとってこんな場だと捉えました。その捉え方こそが、そのコミュニティの文化と言えるのではないのでしょうか。その捉え方も、次の瞬間に変わりうるような揺らいでいるものかもしれませんが、みなさんがみなさんの捉え方で理解したコミュニティの姿が、そのコミュニティの文化なのだと思います。

私のもう一つの目標は、この授業の中で、多文化コミュニケーションを実践してもらおうことでした。クラス、チーム、グループ、自分の中と、レポートのテーマであるコミュニティについて対話があったはずですが。今学期はクラスでのコミュニティの数が多すぎて、一つ一つの関係づくりが不十分に終わってしまったかもしれませんが、クラスもコミュニティであるということ、受講生のみなさんがそのコミュニティの文化の創造者になりうるということは、今後のすべてのクラスにあてはまることです。

何かすでにきちんと存在していくコミュニティに、自分がすっぽり収まるというのは不可能です。きちんと存在していると考えているのは、あなただけかもしれないのですから。すっぽり収まろうにも収まるためのコミュニティは、常に一人一人のイメージとして揺らぎ続けています。その揺らぎの中で、では今は自分としてそのコミュニティをどのようなものとして捉えるのか何をしたいのかを、その時々ではっきりさせた上で、それをほかの人に伝え目標をかなえる道筋を探り続けてほしいと思っています。

**\*参考文献** 牲川波都季・細川英雄『わたしを語ることばを求めて—表現することへの希望』三省堂